私の周りの出雲流庭園

庭園文化研究分科会　　原　裕二

１．出雲流庭園の概要

平成 22 年 11 月 20 日（土）　分科会のメンバーとともに、鰐淵寺庭園～一畑薬師庭園～原鹿豪農屋敷・江角邸庭園～木綿街道・石橋邸庭園～康国寺庭園を見学した。まことに楽しく、有意義な企画だった。「出雲流庭園」とは、私の中では次のように定義している。

◎江戸末期から明治、大正、昭和にかけて盛んであった。

◎出雲国・松江藩内に分布が限られる。

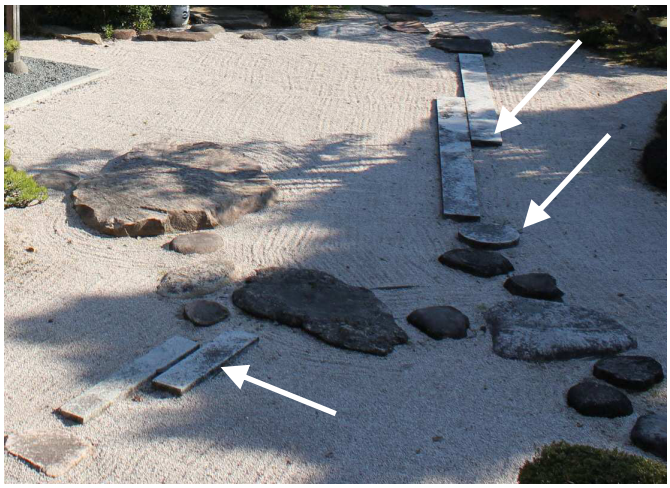
◎水を引き込んだ池や泉のない枯山水様式　―――＞　起伏のない平面的な地割り

◎特徴的な飛石　―――＞　書院風に敷砂の中に高く設ける。人工飛石、短冊石の多用

◎茶庭(露地)の影響が大きい　――＞　一般の庭園に茶席露地の味付けをしたもの

実用よりも観賞が主体

◎来待石製の石灯籠



★同時代の他地域の庭と出雲流庭園との比較

左図は、江角邸豪農屋敷。

右図は、京都仙洞御所　又新亭(ゆうしんてい)の中門付近(明治 17 年近衛家から移設)

裏千家の又隠(ゆういん)を元として作られた茶席露地。飛石は苔の中に配置される。

花崗岩製の短冊石も用いられるが､出雲流に比べて使い方はもっと自然で控えめである。

これらの有名庭園の短冊石を無邪気にまねた技法が、出雲流の飛石？

上記の定義に従うと、純粋な出雲流庭園は江角邸と石橋邸だけであり、あとの 3 つは時代や様式がやや異なる。つまり典型的な出雲流庭園は、寺院や武家屋敷の中ではなく、裕福な豪農や町人階級の住まいで育まれたと考えられる。そして、時代が下って、庭を造るという趣味が一般庶民にも手が届くようになったとき､同じような様式で爆発的な流行を見たと推測される。

２．庭石について

使用される庭石は、時代が新しくなるほど花崗岩類が多くなり、大きさは大型化する。

上記の庭園を時代順に並べ、使用されている庭石の特徴を列記する。

◎鰐淵寺是心院庭園(江戸時代中期)　――　周辺の小型の岩石が中心。流紋岩火砕岩？

◎一畑薬師庭園(江戸文化年間 1804-1818)　――　花崗岩類が中心。一部で流紋岩火砕岩(坂浦町産)や砂岩、来待石が見られる。
◎康国寺庭園(江戸天保年間 1830-1844)　――　花崗岩類中心。安山岩火砕岩も飛石に利用。
◎石橋邸庭園(明治中頃？)　――　花崗岩類が主体。流紋岩火砕岩(坂浦町産)、来待石、安山岩火砕岩など種類が多い。石を寄贈された？
◎江角邸豪農屋敷庭園(明治末期)　――　花崗岩類が主体。一部に来待石。

鰐淵寺庭園のように、1800 年頃までは身近な島根半島部の石を利用していた。その後、農民・町人階級の財力が大きくなり、庭に金をかける余裕が出てくるにつれて、平野部では手に入らない花崗岩を使うことがステータスとなってきたことが窺える。

永井泰未公表資料によると、18 世紀に入ってから木次町・三刀屋町において花崗岩の加工を専門とする石工が移住してきたらしい。来待石や荒島石、福光石などの軟岩と違って、花崗岩類は硬岩であるので、この石に適合した加工技術や道具が求められる。この石工達の多くは、大坂和泉地方から来た者であり、木次の団野八兵衛や三刀屋の和田宗四郎一門などが代表である。和田一門は、1741～1757 年にかけて石見銀山五百羅漢の石窟を造営したことで知られている。この頃から技術的にも、花崗岩類を加工して庭園に使えるようになってきたと推測される。

３．現代の庭づくり

ところで現代では、庭は造園専門の業者によって作られる。

その場合、従来の花崗岩類を使った石組みとともに、結晶片岩(緑色片岩)が用いられることも多い。昔の庭園では石一個運ぶのにも困難を極めていたが、現代ではさほど苦労もなく運搬できるようになった。入手しやすいせいもあって、今では石材は中国産のものが多いと聞く。

しかし、庭石の種類や産地が変わっても、出雲流庭園の流儀をかたくなに守って造られている。

★我が家の坪庭の場合　　飛石は、ほぼすべて花崗岩類である。自然石に混じって、石臼のような人工の加工品が用いられている。飛石以外では様々な石が用いられる。

４．今後の活動方針

前述したように、出雲流庭園の様式は有名どころの庭よりも、どちらかと言えば一般庶民の庭の方に残っている。よって今後は、歴史ある優美な庭園を参考にしつつ、隠れた出雲流庭園を発掘し、その特徴や技法について調べていきたい。